

44. 高圧酸素療法が奏効した腸管嚢胞状気腫の1例

横井公良*¹⁾ 恩田昌彦*¹⁾ 森山雄吉*¹⁾
 田中宣威*¹⁾ 滝沢隆雄*¹⁾ 徳永 昭*¹⁾
 金 徳栄*¹⁾ 古川清憲*¹⁾ 田代真一*¹⁾
 沖浜裕司*¹⁾ 片山信仁*²⁾ 本多一義*²⁾
 恵畑欣一*²⁾

(¹⁾日本医科大学第1外科
 (²⁾ 同 放射線科)

腸管嚢胞状気腫は小腸、大腸の粘膜下層あるいは漿膜下層に多数のガスを含んだ嚢胞を形成する比較的稀な疾患で、酸素療法とくに高圧酸素（以下OHP）療法が有効であることが知られその報告例が増えている。最近、我々はS状結腸の腸管嚢胞状気腫に対して高圧酸素療法を施行し治癒せしめた1例を経験したので報告する。

症例：50才、男子。主訴は腹痛、粘血便、下痢。昭和63年6月4日、食後に急激な腹痛が生じ水様性下痢が出現した。翌日腹痛、下痢は消失したが、粘血便が持続するため某医受診。注腸造影を施行したところ腸管嚢胞状気腫と診断され当科紹介入院した。既往歴では、20才のとき虫垂切除を受けている。また職場にて過去20年間トリクロルエチレンを取扱う仕事に従事している。

入院時貧血、黄疸なし。腹部に圧痛なく、腫瘤も触知しない。腹部単純X線像でS状結腸を中心に小円形の蜂窩状ガス像が認められた。入院後諸検査施行後、直ちにOHP療法を開始。3ATAで2.5時間を6日施行。施行5回目直後の注腸造影ではわずかに腸管壁の隆起は認められるものの著明に改善されており、計6回のOHP療法後退院となった。退院後、経過は順調で1年を経過した現在悪化、再発を認めていない。

腸管嚢胞状気腫の原因については諸説があるが、本例では長年にわたりトリクロルエチレンを扱っていたことが大きな要因となっているのかもしれない。本症の嚢胞内のガスの主成分は窒素であるため、高濃度の酸素吸入が有効であると言われている。本例でも3ATA、2.5時間のOHP療法を計6回施行し治癒せしめた。

以上、高圧酸素療法が奏効した腸管嚢胞状気腫の1例を報告するとともに文献的考察を加える。

45. 放射線性膀胱炎に対する高圧酸素療法の経験

池田耕治*¹⁾ 川原元司*¹⁾ 大井好忠*¹⁾
 大坪喜代子*²⁾ 嶽崎俊郎*²⁾ 宮田晃一郎*²⁾
 山本五十年*³⁾ 澤田裕介*³⁾

(¹⁾鹿児島大学医学部泌尿器科
 (²⁾ 同 小児科
 (³⁾ 同 救急部)

今回我々は放射線性膀胱炎に対して高圧酸素療法を試み良好な成績が得られたので報告する。症例は5才の女児で、昭和60年2月14日、悪性奇形腫に対して腫瘍摘除術を施行され、その後化学療法と放射線性療法(5000rad.)をうけている。昭和61年3月から肉眼的血尿が出現し、平成元年2月、両側水腎症を認めため、当科を紹介された。排尿時膀胱造影にて両側膀胱尿管逆流症を認め、当院小児科に入院した。当院に設置されている中村鉄工所製の高気圧酸素治療装置を用いて、高圧酸素療法を60回施行し、臨床症状は改善し、片側の膀胱尿管逆流症も消失した。内視鏡的所見と、レントゲンの所見の経過を含めて報告する。